

Title	「絵本の「読み聞かせ」から「読みあい活動」へ：子どもの育ちに寄り添う楽しい読みの世界とは?読み手の読みの謎を紐解こう！」報告（2014年度 聖学院大学総合研究所【子どもの人格形成と絵本】研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究會主催 研究シンポジウム
Author(s)	石川, 由美子 齋藤, 有
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.2, 2015.1 :32-33
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5248
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度 聖学院大学総合研究所
[子どもの人格形成と絵本] 研究プロジェクト 子どもの育ちと絵本研究會主催 研究シンポジウム
「絵本の「読み聞かせ」から「読みあい活動」へ
—子どもの育ちに寄り添う楽しい読みの世界とは？読み手の読みの謎を紐解こう！—」報告

「絵本の読み手は、子どもに絵本の世界をどのように伝えているのだろうか？」

今回のシンポジウムでは、この謎に答える足がかりとして、主に絵本の「読み手」の読みに注目した研究について話題提供を行った。シンポジストは、聖学院大学絵本研究プロジェクトに聖学院大学内、外から集い同一のテーマを共に研究している。今回は、その研究の過程を、実験に利用した絵本に制約される読み手と聴き手の観点、読み手の読み合い中の脳機能の観点、そして、実験に参加した読み手のアンケートおよび実験後インタビュー報告の観点から、報告した。

1. オノマトペ絵本

絵本の読み手は、子どもに絵本の世界をどのように伝えているのだろうか？この謎を紐解くためには、「読み手が絵本からどのような情報を得て、それを読み合いのしぐさや、表情、声に変換していくのか」このメカニズムを解明する必要がある。すなわち、絵本そのものがどのような人工物であるのかは、読み手にとって重要である。今回の実験に利用した絵本は「ころころころ」元永定正が福音館より出版した絵本であった。これらの絵本は、オノマトペ絵本と呼ばれ、誕生してまもなくから利用され長く子どもたちが楽しむ絵本である。ことばの前のことば、擬音、擬態語がふんだんに絵と共に埋め込まれている。本シンポジウムでは、実際の実験報告に先がけて、感性ことばと称される擬音・擬態に関する知見を紹介した。オノマトペ絵本を用いた読み合いでは、読み手にとって、絵本に描かれる文字は文字としてではなく絵としての役割も担うものであり、またその文字が絵と共に読み取りのための多くの情報を与える可能性がある。また、子ども（聞き手）にとっては、そのような読み合いは、先行研究で述べられている

ような単なる言語発達にとどまらない育ちに影響する可能性があることを示唆した。また、実際に実験に参加してくださった読み合いの熟達者、宇奈月やつ子氏の「ころころころ」のライブもあり、参加者は絵本研究ならではの学びと癒しの不思議な体感も出来たのではないかと思う。

2. 光トポグラフィによる絵本の読み手の脳活動計測から

ヒトが何気なく行動している時にも、脳の中ではさまざまな働きが行われている。近年、計測機器の発展とともに脳の働きが目に見える形で捉えられるようになった。とりわけ、光トポグラフィは頭に専用の固定具を頭に装着することで、座った状態で、体に動きがあっても計測できる。道具を使用した計測も可能なため、絵本を手を持って読んでいるときの脳活動も捉えられる。

本研究では絵本の読みの熟達化について、光トポグラフィを用いて検討した。絵本の読みあい経験豊富な読み手と、経験が浅い読み手を対象に、①絵と文字がある実物の絵本、②真っ白な背景に文字だけ描かれた白絵本、を読んでいる時の脳活動を計測した。

その結果、経験豊富な読み手では実物絵本を読んでいる時には左前頭前野（言語野：有意味語の発話に関与）と右前頭前野（発話の抑揚に関与）、ならびに左頭頂葉（視覚イメージや文脈理解に関与）が活動していたが、白絵本を読んでいる時には左前頭前野のみ活動していた。これらのことから、経験豊富な読み手は、絵からも世界観（文脈）を取り込み、子どもたちを引き付けようと抑揚をつけて絵本を読むことが示唆された。

一方、経験が浅い読み手では、実物絵本読み中に左前頭前野が、白絵本読み中に左前頭前野と右前頭前野が活動していた。そのため、経験が浅いと絵本を読む際に文字ばかり追って言語野のみ活

動するが、むしろ白絵本では絵に左右されずに抑揚をつけて伝えようとする可能性が示唆された。

3. 読み手のアンケート および実験後インタビューより

本話題提供では、絵本読みの熟達者と非熟達者において異なるのか点をアンケートおよびインタビュー調査の結果から報告した。まず、「絵本の読み聞かせにおいて気をつけていること／気をつけようと思っていること」という質問の回答を分類した結果、①読みの技術、②聞き手への配慮、③環境設定、④イメージ、表現の4つの側面が抽出され、このうち、熟達者では「子どもたちの表情やしぐさ、言葉を感じとりながら」といった②聞き手への配慮に言及が多いこと、非熟達者では「ゆっくり、はっきりとした大きな声で」といった①読みの技術に言及が多いことが明らかになったことから、熟達者と非熟達者の違いは、読みの技術面でなく、聞き手である子どもに配慮するかどうかにあることを報告した。また、熟達者でも読み聞かせ歴が10年未満と浅い場合に①読みの技術へ言及していたことから、熟達過程で読みの技術は自動化されるのではないかと示唆した。また、読みの側面として抽出された「お話の世界に入る」といった④イメージ、表現は、先行の保育者を対象とした研究で見られなかった側面である。実際に「なるべく自分の主観が入らないように」という保育士経験者がいたことから、熟達者でも、保育者として読むのか、また別の立場で読むのかによっても自身のイメージの世界の表出の仕方に違いがあるのではないかということを示唆した。この、自身のイメージの世界の表出をどのように、どこまでするのか、という点に関しては会場を交えて活発な意見交換が行われた。



左上：宇奈月やつ子氏（コメンテーター）
中央上：齋藤 有先生（発題者・コメンテーター）
右上：水谷 勉氏（発題者・コメンテーター）
下段：会場風景

（文責：石川由美子 [イシカワ・ユミコ] 聖学院大学人間福祉学部子ども心理学科教授）

（文責：齋藤 有 [サイトウ・ユウ] ルーテル学院大学総合人間学部助教）